

書と詩 4—書（画、舞踊など）・歌謡・詩・言葉・音・こころ

江戸時代後期 [文化・文政期（1804～1830年）] 俳諧は、日本各地に普及し盛んになつたが、それらは、卑俗で趣味的な、お遊び俳諧であつた。俳人たちは俳諧を弄び、大衆に媚、名利を追いかけた。彼らは芭蕉を俳聖としてまつりあげ利用したが、芭蕉の精神は敬遠した。そのように退廃した中でも、芭蕉や蕪村の芸術の真髓を学ぼうとする俳人たちもいたが、彼らには、その芸術としての俳諧を復活させる力はなかつた。そのような状況下、農民の目線で、社会や小動物を、独創的な句に詠んだ小林一茶が活躍した。彼は、65歳の生涯に2万1200句ほどの句を残している。芭蕉は49歳で976句、蕪村は66歳で2918句である。

小林一茶 [1763（宝暦13）～1827（文政10）]

一茶は芭蕉より119年後、蕪村より47年後に、長野県信濃町の農家に生まれた。

一茶の家は、中の上程度の自作農で、貧しくはなかつたようである。

本名は弥太郎。3歳のとき母と死別し、祖母に育てられた。8歳のとき継母がきた。

弟が生まれ、長男だつたが、15歳で江戸に奉公に出され、あちこちの奉公先を転々とする貧しい生活だつたという。25歳頃、葛飾派の素丸や二六庵竹阿や今日庵元夢に入門し、俳諧を学び始めた。溝口素丸の所では、執筆を務めている。

※執筆とは書記のこと、連歌や俳諧の会席で、師匠の指示に従い、句を懐紙に書き記す役のこと。執筆には能書が選ばれた。

※葛飾派は山口素堂を祖とする一派。素堂は芭蕉の友人。農村地帯を地盤とした一派。俳風は平俗。

1791年寛政3年（29歳）の春、江戸に出てからはじめて帰郷し、この頃から「一茶」を名乗つた。

「西にうろたへ東にさすらひ、一所不^あ住の狂人有り。旦には上総に喰ひ、夕には武藏にやどりて、しら波のよるべをしらず、立つ淡の消えやすき物から、名を「一茶坊」といふ。」（『寛政三年紀行』より）

1792年寛政4年（30歳）から寛政10年（36歳）まで、俳諧修行のため関西、中国・九州地方を遍歴し、多くの句を作る。

1801年享和元年（39歳）の春、帰郷。父が病死（『父の終焉日記』）、以後12年間、遺産相続の件で、継母・弟と争う。

1814年文化11年（52歳）28歳の「きく」と結婚。三男一女を授かるが、みんな幼くして死去。

1820年文政3年（58歳）中風にかかるが快復。『おらが春』を執筆。『俳諧寺記』

1823年文政6年（61歳）妻「きく」37歳で死去。

このころ一茶は『諸国人気俳人番付』の首位になつてゐる。

1824年文政7年（62歳）田中ゆき（38歳）と再婚するが、2ヶ月ほどで離婚。

1826年文政9年（64歳）「やを」（32歳）と結婚。

1827年文政10年（65歳）火事で自宅が燃え、焼け残つた土蔵に住む。

一茶、土蔵の中で死去（65歳）。

1828年文政11年一茶の没後に娘「やた」が生まれた。

1829年文政12年『一茶発句集』刊行される。柏原宿に一茶の句碑第1号建立。



一茶終焉の土蔵（長野県信濃町柏原）

是がまあつひの栖か雪五尺



一茶愛用の硯



一茶像

一茶は、文化文政期（化政期ともいう）に活躍した俳人で、その俳諧は「化政調」といわれる。

ぶんかぶんせいき
ぶんせいき

一茶は江戸時代後期に生きたが、そのころの日本と世界の状況を、さりと見てみよう。

中国は清代、1735年乾隆帝即位、「三世の春」を過ぎ、

アヘン戦争（1840年）へと坂を轉かり落ちて行く

19世紀の「科学の世紀」へと続いて行く。

ワーズワース、ジエームス・ワットらと同時代人である。



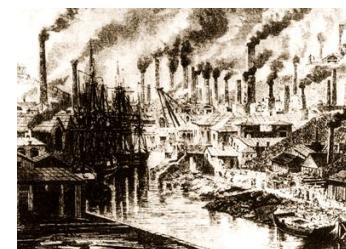
フランス革命バスチユ牢獄襲撃 1789 年



ブレイク「ニュートン」1795年



モーツアル (1756~1791)



イギリス、グラスゴーの工場



ジョン・コンスタブル「干し草車」 182



1793年、乾隆帝に謁見する イギリスのマカートニー使節団

アメリカ独立宣言採択（1776）、
アメリカ合衆国憲法制定（1787）、
フランス革命（1789）、ナポレオン、フランス皇帝に即位（1804）、
ドイツ・オーストリアなどで、モーツアルト、
ベートーヴェン（1770～1827）などのクラシック音楽が流行。
中南米諸国の独立（1816～1825）アルゼンチン、チリ、
メキシコ、ペルー、グアテマラ、ブラジル、ボリビア。
コレラの世界的流行（1822）イギリスで蒸気機関車完成（1825）
アメリカでインディアン移住法（1830）
チエロキー族オクラホマへ強制移住（「涙の旅路」 1838）
アヘン戦争（1840）



ロコモーション号



ナポレオン (1769~1821)



「涙の旅路」 1838 年



ベートーヴェン
(1770~1827)

一茶が生きた時代は、天下太平のようにみえるが江戸幕府の衰退期であつた。同時代人に良寛、北斎、酒井抱一、亀田鵬斎、市川米庵らがいる。文化文政期は、日本文化史上類希な時代であり、江戸時代は、現在の日本文化の原型が形成された時代（青木美智男氏著『日本文化の原型』）といわれるが、それはどういうことであろうか。

江戸時代の特色を、青木美智男氏は、一、二百数十年戦争がなかつた。二、村人たちが定住生活を営めるようになつた。三、突如全国各地に城下町などが続々と誕生した。四、士農工商という強固な身分制が貫徹した（職分制国家）。の四つをあげ

ている。また、出版文化が確立し庶民が文化を享受できるようになった。古代・中世の伝統や中国文化の影響から解放され俳諧や歌舞伎、浮世絵などの日本独自の文化が創造された。しかし、これらは日本の古典と中国文化をベースに創られたものである。「文化には、つくり出すはたらきと、つくられたものと、享受するはたらきとの三つの面がある」（家永三郎『日本文化史』）

江戸後期は、中国の文化、日本の古典文化、欧米の文化の三つの文化が融合し、

日本独自の文化が形成された時代であつた『日本の歴史 別巻 日本文化の原型』小学館)

お金のない庶民でも、親は教育熱心で、子どもを寺子屋に通わせた。
(年季奉公)に出た子が差別され、掺めな思ひをしなくてもいいようねんきょうこう

卷之三

しかし、信州の、村の子どもたちのほとんどは、春夏秋は農作業の手伝いで忙しく

遊び盛りの子どもたちは、苦しみながら勉強に励んだようである。

化政期の終わりころには読み・書きのできない村人は、ほとんどいなくなつたという。

いろはでも知りたくなりぬ冬籠り	(一茶 「七番日記」 文化10年10月)
雪とけて村一ぱいの子ども哉	(一茶 「七番日記」 文化11年1月)
腹上で字を書習ふ夜寒哉	(一茶 「七番日記」 文化11年7月)
古盆の灰で手習ふ寒さ哉	(一茶 「七番日記」 文化13年11月)
初雪やイロハニホヘト習声	(一茶 「七番日記」 文化15年10月)
なまけるなイロハニホヘト散桜	(一茶 「七番日記」 文化15年11月)

化政期には、平仮名や片仮名が読める庶民を対象に、
滑稽本・人情本・読本(絵入本)・合巻(絵草子)などが刊行された。

じっぺんしやいいく とうかいどうちゅうひざくりげ
十返舎一九『東海道中膝栗毛』
1802~1814年に刊行。『続膝栗毛』
は1810~1822に刊行された。
滑稽本の代表作。

十返舎一九は日本で最初の専業作家といわれる。

卷之三

梅見譽 美四編序
梅や下葉土産と竹の皮を乞ひ等を堤やく
送る本下川故人三馬の詠うる狂言等
等へ梅の香花の如く放葉園と東風の如く也
花と並んで小梅のすまやか百花園より
おままで枝うきり自うりかへて梅がたぐ

ためながしゅんすい しゅんしょくうめご よみ じょぶん
為永 春水『春色梅児誉美』序文
初巻は 1832 年出版された。

人情本の代表作。
漢字には、だいたい振り仮名
(ルビ) がふってある。



きょくてい たきざわ ば きん なんそうさとみはっけんでん
曲亭(滝沢)馬琴『南総里見八犬伝』

1814 年 (文化 11) 刊行開始～1842

1811-1844 (文化-11) 内閣文庫
年完結 全98巻106冊。
読本の代表作。画は歌川国芳。



りゅうていたねひこ にせむらさきいなかげんじ うたがわくにさか
柳亭種彦『修紫田舎源氏』挿画歌川国貞

1829年（文政12）～1842年刊
合巻の代表作。

修紫とは紫式部の偽物という意味の偽称。
絵のまわりに平仮名で説明文がついている。



「江戸名所図屏風」部分 寛永年間 出光美術館蔵



寺子屋

一茶は、人間や社会・自然をどのように見、それらとどのように関係したであろうか。

一茶の生きた時代は、天下泰平で、大消費地の江戸の庶民（町人）は教育熱心でもあり、文化活動も盛んであったが、徳川の体制は足下から崩壊しつつあった。

寄席・芝居・祭り・花火など、なんでもある大江戸であつたが、庶民の生活は苦しかった。

また、大飢饉、百姓一揆や打ちこわしがあいつぎ、農民たちも苦しんでいた。

大江戸や芸なし猿も花の春 一茶「七番日記」 文化7年（1810）1月

大江戸や犬もありつく初鯉 一茶「文政句帖」 文政8年（1825）3月

一茶は小さな動物や子どもを詠んだ詩人として有名だが、一茶の本質は、

若い時から、死ぬ時まで、社会や政治に関心をもち続けた社会派詩人であつたと思われる。

歐州人が日本に初めて来たのは、ポルトガル人が種子島に漂着した1543年と思われるが、その後スペイン人のフランシスコ・ザビエルがポルトガル王の依頼でインドに向かい、その足で1549年に日本人のヤジロウらとともに来日（薩摩半島）、

キリスト教（カトリック）やメガネを伝えた。

1600年にオランダの商船リーフデ号が大分県に漂着。家康は、乗つっていたオランダ人のヤン・ヨーステンとイギリス人のウイリアム・アダムス（三浦按針）らを気に入り江戸へ連れていた。1609年、日蘭貿易開始。1619年カラーンがフランス人として初めて、日本に上陸。その後、幕府は鎖国令を出し、スペイン船、ポルトガル船の来航を禁止。日本船の海外渡航を禁止した。1641年、オランダ人は出島だけで交易が許された。鎖国といつても朝鮮、琉球とは国交があり、中国（明・清）とオランダとは交易した。（海外との交易路は「四口」があった）中国人は出島ではなく、長崎の「唐人屋敷」に住んでいた。鎖国が完了してから100年ほど後、1739年にロシア人の探検船が東北、関東地方に1778年ロシア船が厚岸に来航。1792年（寛政4）9月、ロシア人のラツクスマンが根室に来航。ラツクスマンは大黒屋光太夫一行の送還を口実に、日本との通商を求め、箱根で交渉したが幕府に拒絶され帰国した。

当時ロシアは世界市場での貿易拡大をめざしていた。ついで、

1804年（文化元）9月、再び、ロシア人の全権大使レザノフ一行が、

津太夫一行を乗せて、貿易を求める、軍艦ナデジュク号で長崎に来航したが、幕府は交渉を拒絶。レザノフは幕府を恨みつつ日本を離れた。その後、何度も、ロシア人は来航した。イギリス人は、1796年プロートンが室蘭に来航して以来、化政期に何度も長崎や浦賀に来航している。1791年米国人のケンドリックが紀伊大島に上陸以来、ペリーによつて開国（1854年）されるまでに、米国人は何度も来航している。

神国の松をいとなめおろしや舟 一茶「文化句帖」 文化元年（1804）12月

春風の国にあやかれおろしや舟

〃

日本の年がおしいかおろしや人

〃

1807年（文化4）幕府は、海防力強化と、アイヌを和人化（和人語の使用、

名を日本風に改名、肉食禁止、穀物食の奨励、仏教と神道の信仰の強制など）するために、蝦夷地（北海道）の直轄化に向かう。一茶は、はじめ、アイヌの和人化政策を歓迎した。

御仏やエゾが島へも御誕生 一茶「七番日記」 文化8年（1811）5月

花さけや仏法わたるエゾガ島

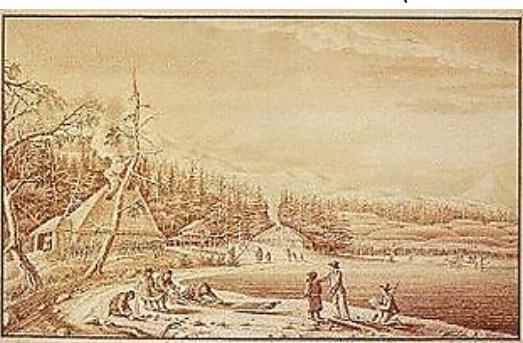
〃

その後、暴利を貪る、詐欺まがいの、江戸の商人資本家により、アイヌは、

漁業労働者化し、苦しい生活を強制されてゆく。それを見て一茶の考え方は変わつた。

来て見ればこちが鬼也蝦夷が島 一茶「文政句帖」 文政5年（1822）4月

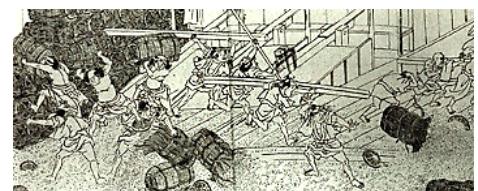
商人やうそうつしに蝦夷が島



1805年に描かれたアイヌのチセ（住居）の絵



大黒屋光太夫と磯吉



打ちこわし（江戸時代の民衆運動のひとつ）

ポルトガル人やスペイン人は、カボチャ・スイカ・トウモロコシ・ジャガイモ・パン・カステラ・タバコ・地球儀・メガネなど、現代の日本にとって、なくてはならない物を伝えてくれた。

平和な時代が長くつづいて、平和ボケになつた化政期の民衆の興味は、食い氣と色氣と衣装であつた。『太平記』や『三国志演義』『水滸伝』などが愛読され、戦争が娯楽になつた。農村では豪農と多数の貧農が生まれ、本百姓や水呑百姓といつて差別するようになつた。村で暮らせなくなつた貧農は、都市に出て、雑役や野菜売り、駕籠かき、日雇い仕事など、その日暮らしのきつい仕事をするしか生きるすべのない貧民になつた。

平和がつづいて、はじめて、農民が定住できるようになつた。

夫婦と子ども、両親を最小単位とする家族が生まれ、

その家族がいくつか集まつて、「村」が誕生し、

何代にもわたつて住み着く農民家族があたりまえの、

村の風景となつた。

田畠を所有し、暮らしにゆとりができると、

立派な屋敷を建てたくなり、

自分の田畠や家屋敷をもつようになると、

家の財産という意識が生まれ、財産ができると、

それを子どもたちへ相続させたいという「家」の意識が生まれ、個人や家族よりも「お家」大事という観念が社会全体に定着していった。

「お家」への関心は祖先崇拜を生み、墓に墓石を建てるようにもなり、

その墓碑名は個人名から「何々家之墓」と彫られるようになつていった。

村人たちは、共同で生産し生活するようになり、

「村社会」という共同組織をつくつた。

村には村社会の安全と繁栄を祈るために産土神が祀られた。

「わが里」や「望郷」といった地域意識も、

このような村の成り立ちの経緯から生まれた感情である。(青木美智男氏)

江戸時代のはじめ頃、大坂、京都、江戸のほかに、仙台、名古屋、金沢、

彦根、岡山、広島、徳島、松山、高知、高松、萩、福岡、熊本など、巨大消費都市である城下町が各地に誕生した。

土農工商という、職業と結びついた、強固な身分制度は、個人についているのではなく、家と結びついていたから、職業選択の自由はなく、生まれながらにして、

家の職業(家職)を継がなければならないように決定されていた。しかし、

江戸後期には、貧農などが村を離れ、都市に出て働きはじめ、強固な身分制度が、ゆらぎだした。

教育熱心だった江戸の庶民は、幼い時から読み書き・そろばんを習わせた。

習つた書体は「御家流」おいえりゅうで、これは身分を超えた共通の書体、書き言葉であつた。

この共通の書体が土農工商という身分制度を内部から崩壊させたのかもしれない。

武士の身分制度は厳格で、その家柄や家格は半永久的に変わることはない、と思われた。

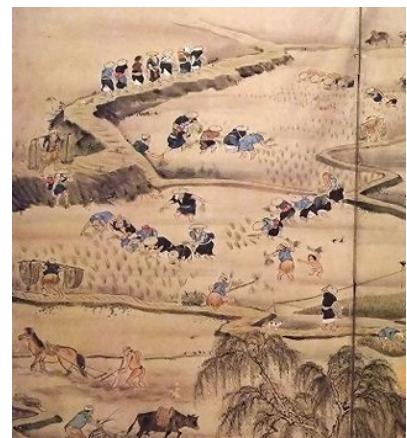
自由を求める武士は、現実から逃避して、余技としての芸術や学問に生きがいを感じた。

そのような風潮は、農工商身分にまで広がり、偉大な文人文化が花開いた。



江戸城下町の再現模型

江戸東京博物館



しゅうは
齐藤秋圃「四季農耕図屏風」部分
国立歴史民俗博物館蔵（千葉県佐倉市）
齐藤秋圃（1769～1861）



文政12年（1829）、一茶の三回忌追善のために

弟の仙六と一茶の門人たちによつて、一茶の句碑第一号が建てられた。

今は、一茶の故郷の長野県信濃町柏原の諏訪神社の境内にある。

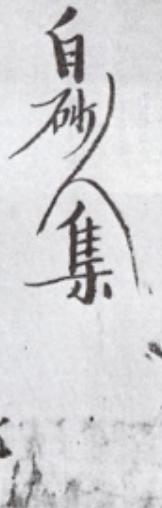
門人たちが選んだ句は、

松陰に寝て喰ふ六十余州哉

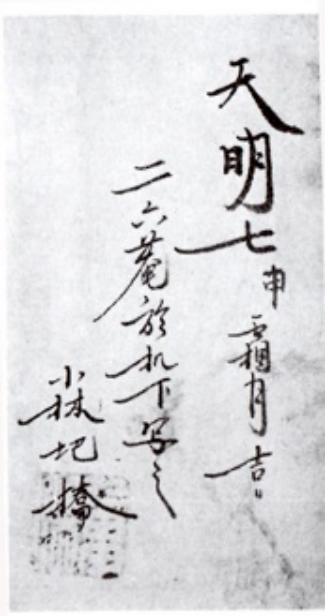
（文化9年作）

現代、一般的には、一茶は小動物や子どもを詠んだ俳人と思われているが、彼と同時代の門人たちは、一茶を政治的な社会派の詩人と見ていたようである。

一茶の筆跡



天明7年（1787）一茶 25歳の書



「白砂集」の題と奥書部分



其角書 短冊部分

竹の尾を折節聞くや五月闇

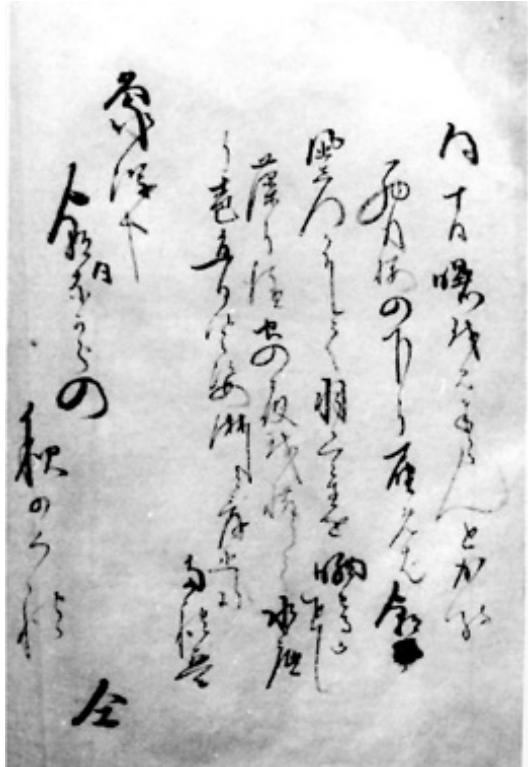
※宝井其角は芭蕉十哲の一人。はじめ榎本其角と名のつた。

一茶は23、4歳ころに俳諧師の道に入つたようである。
田舎出の少年が、どのようにして学問や教養を身につけたのかは、良く分からぬが、努力して筆一本で生きようと決めたようである。

上の図版の書は、坪橋時代のものである。この最初期の書は、其角の書風を真似た稚拙なものであるが、書には生まれつきセンスがあつたようだ。※坪橋は、一茶25歳頃の別号。
右側の図版の「足元にしらぬ水あり」「貞徳」は、と薄く書かれた部分は書風が違う。別の時期に書き込まれたものか？



一茶の句碑第1号



「象潟町の旅のうね」
寛政元年（1789）一茶 27歳の書

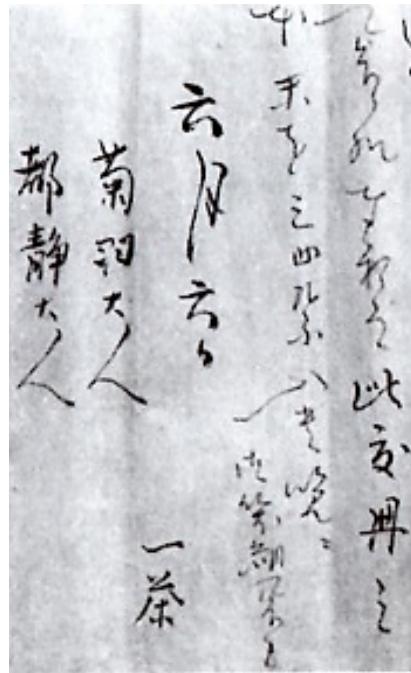
やや達筆になつてきている。署名が菊明になつてゐる。※菊明は一茶の初期の別号。

「同十日、曙を見奉らんと、かの西行桜の下に望めば、朝風しづかにして、羽二重を晒せるがごとし。藻に住虫の夜を惜しみて、水底に声立てる風姿淋しみ、爰に止たれば、

象潟や朝日ながらの秋のくれ

同

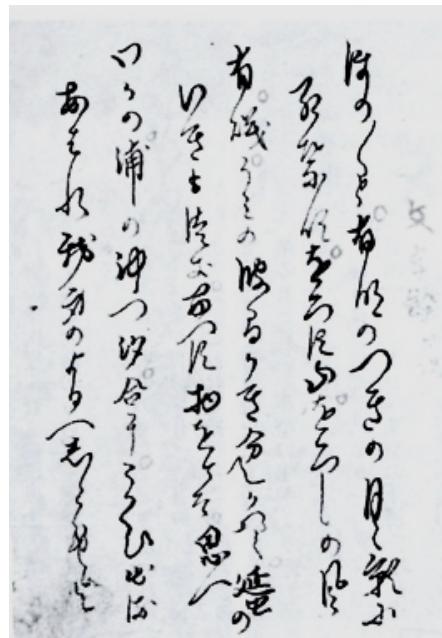
一茶は能筆であつたから、26歳の時、今日庵元夢の執筆になり、28歳の時、溝口素丸の執筆になつてゐる。執筆は書記である。
執筆になる条件は、俳諧の作法に精通していること、能筆であることであつた。



「菊羽・都静宛て書簡」部分
寛政10年(1798)4月 一茶36歳の書

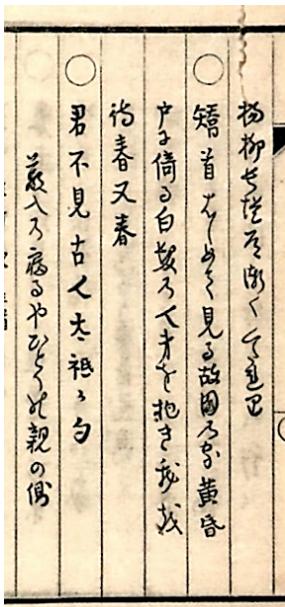
上の書簡は、上方から、江戸の葛飾派の俳人に、江戸に帰ることなどを知らせたもの。
一茶の「茶」の字の「ひとがしら」が人字のよう
に開いていて、書き方は寛政8年頃からの特徴である
らしい。線に独特のうねりがある。

「...可被下候様奉願候。此度冊の本末を三四葉
入貴覽ニ、御笑納可被下候。以上。六月六日 一茶
都静大人」

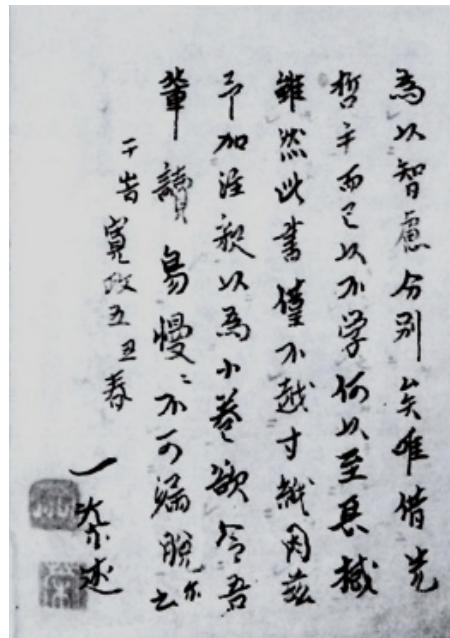


「仮名口訣」寛政5年(1793)一茶31歳頃の書

上の「仮名口訣」は、其角と蕪村の書を真似てつくられて
いるようだ。

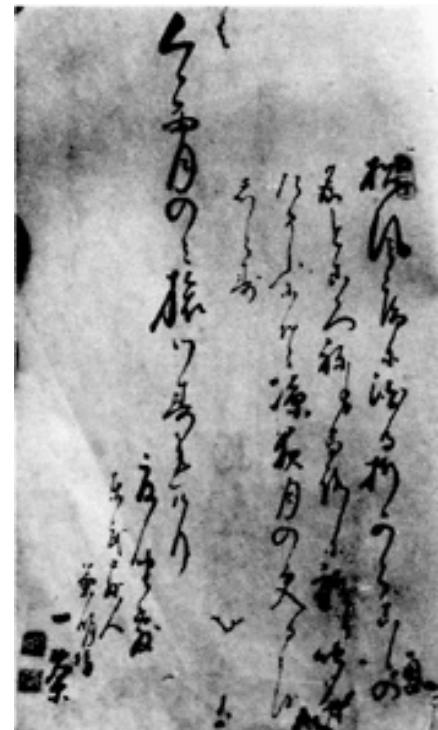


蕪村「春風馬堤曲」自筆版下部分



一茶は寛政3年29歳の時、14年ぶりに故郷に帰っている。
その後、一茶は、寛政4年3月末から寛政10年9月末まで約
6年半、畿内・四国・九州・中国地方を旅した。30歳から36
歳の間である。

この旅は、師の二六庵竹阿が寛政3年(1791)に亡くな
った後、師の遺稿集『其日ぐさ』をもつて、師の門人たち
のところを廻る俳諧修行の旅であった。一茶は各地に住む有
名な俳人たちと面識をもち、しだいに知られていく事になる。
この旅の間の、寛政4年の末ごろ、一茶の書風が一変した。
一茶は意識的に書風を変えた、と言われている。

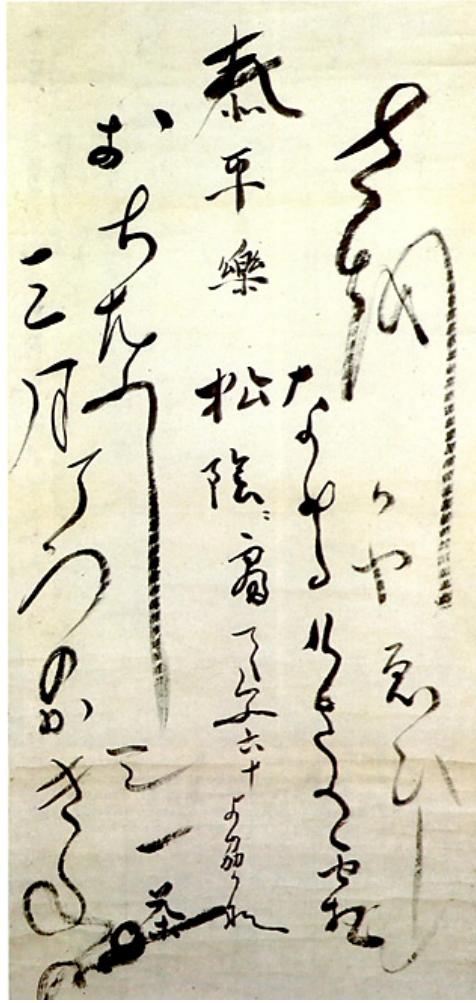


「松風庵『客名録』」寛政3年(1791)頃
一茶29歳の書

上の書は、一茶が千葉県に住む俳人の松風庵
玉斧を訪ねた時のものである。このころ、一茶の
書技は、めざましく進歩している。この頃から一
茶と名のつているようだ。

「松風庵に泊る折から、国名などころ、ねもごろ
に語り聞せたまふにぞ、涼夜月の更るをしらず、
書技は、めざましく進歩している。この頃から一
茶と名のつているようだ。

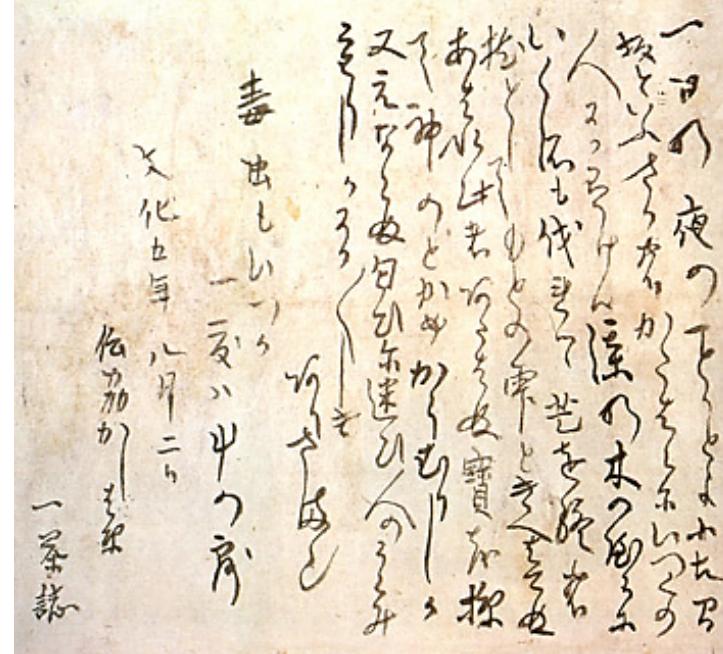
今宵のミ旅わすれけり夏座敷
東武散人 菊明坊 一茶」



「泰平樂」文化九年？ 一茶 50歳の大幅 124.3×58.8 cm
 さをしかやゑひしてなめるけさの霜
 泰平樂 松陰に寝てくふ六十よ州かな 一茶
 おち葉して三月ごろのかきねかな

一茶は、これを書いた頃、故郷に永住する決意をし
 帰郷、翌年（文化10）遺産相続が和解し、終の棲家に
 ありつき、定住することになった。

翌年（文化11）52歳の時、赤川村の「きく」と結婚
 した。きくは28歳であった。



いそう ゆきだお
 遺草「行倒れ」 文化5年（1808）一茶 46歳の書（俳文）

一茶の書風は、文化2年（43歳）から文化10年（51歳）
 の間にほぼ完成したと思われる。

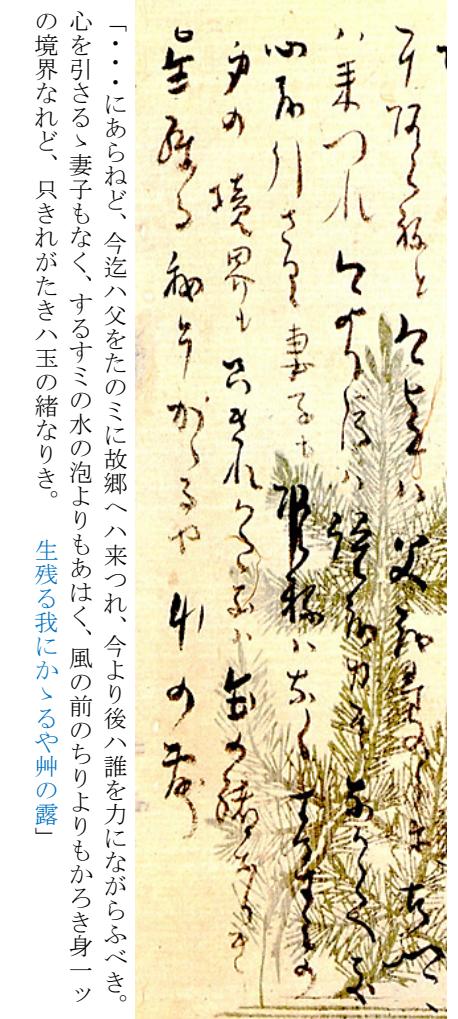
この間、一茶は、文化元年に葛飾派を離れ、夏目成美的
 句会にでるようになった。また、文化4年から文化10年に
 和解するまで、遺産相続の交渉のためたびたび帰郷した。
 上の「遺草」は、祖母の33回忌のために帰郷した折の作。
 ※ 遺草とは遺稿のこと。

二日の夜のことかとよ。小古間坂といふさかのかたはら
 に、いづくの人にか有けん、漆の木のやうに、幾どころも
 伐られて、芭^{すすき}を終の枕として、もとの零^{しづく}ときへはてぬ。
 あれ此者あたはぬ宝を掠^{このもの}て神のとがめかうむりしか。又
 えならぬ句に迷ひ人のうらみ重りしか。にがくしきありさ
 ま也。

毒虫もいつか一度は艸の露 一茶
 文化五年八月二日

信州かしは原

一茶誌



「…にあらねど、今迄ハ父をたのミニに故郷へ來つれ、今より後ハ誰を力にながらふべき。
 心を引さるゝ妻子もなく、するすミの水の泡よりもあはく、風の前のちりよりもかろき身一ツ
 の境界なれど、只しがたきハ玉の緒なりき。 生残る我にかかるや艸の露」

「父の終焉日記」部分 きょうわ
 (1801) 4～5月 一茶 39歳の書

これは一茶の父が病に倒れて
 から死までの、約1ヶ月間の看
 取り日記の一部。父の遺言をめ
 ぐり、継母・仙六と一茶の対立
 が描かれている。一茶の父への
 優しさが涙をさそう。



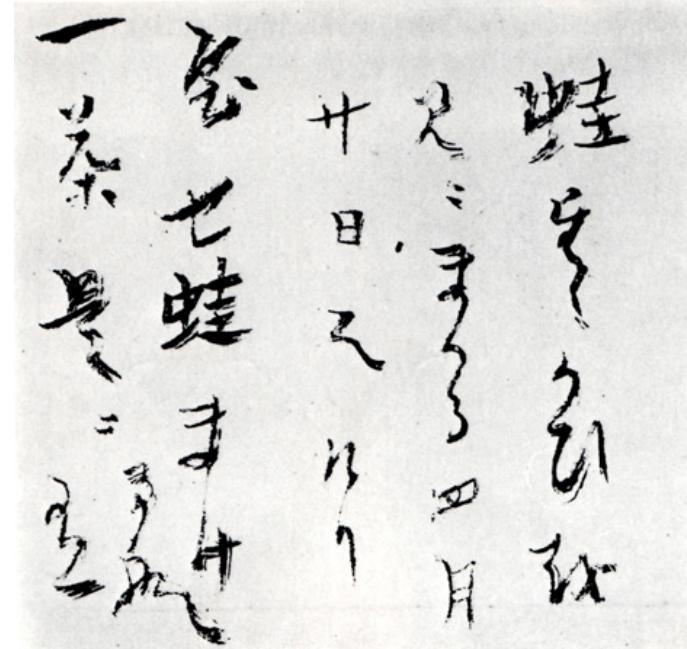
扇面 俳諧歌 60代

里々を涼しくなして 夕立はミ山かくれに行くひかり哉



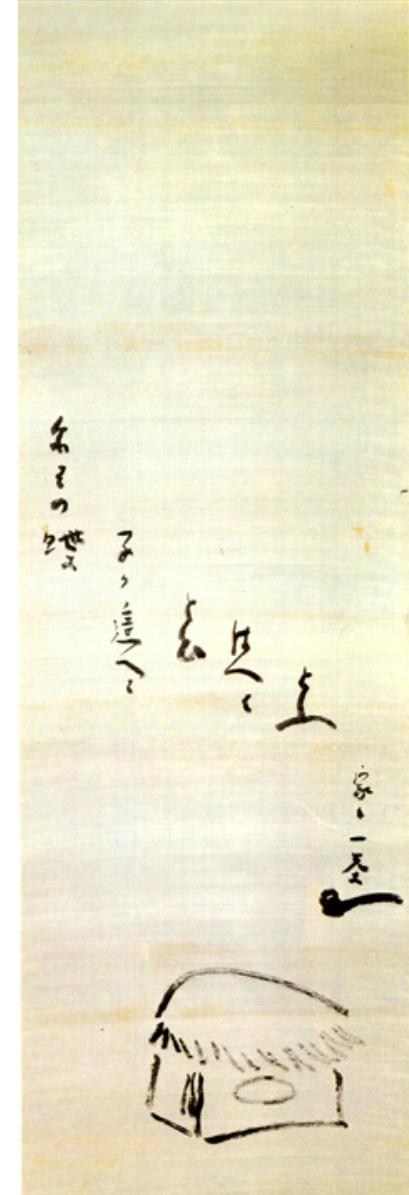
うちわ はいかいか 俳諧歌 60代

こうなり 功成て身しりぞくというを 俳諧寺入道一茶
里々を涼しくなして夕立の ひかりしりぞく山の外かな



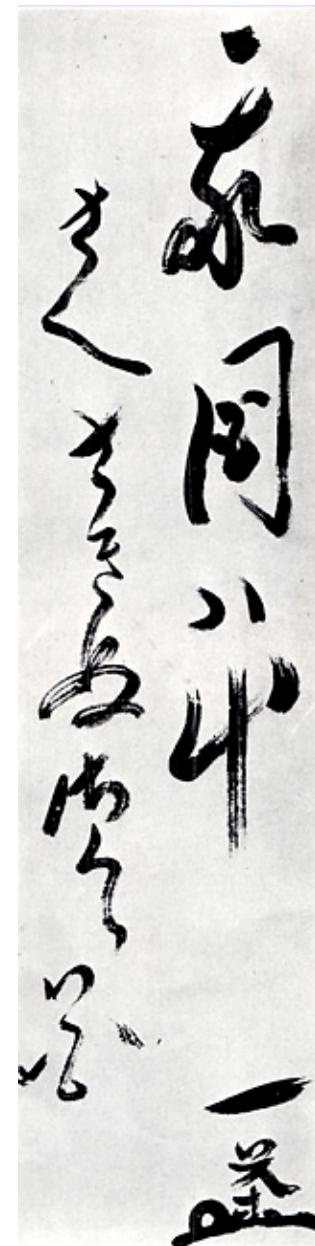
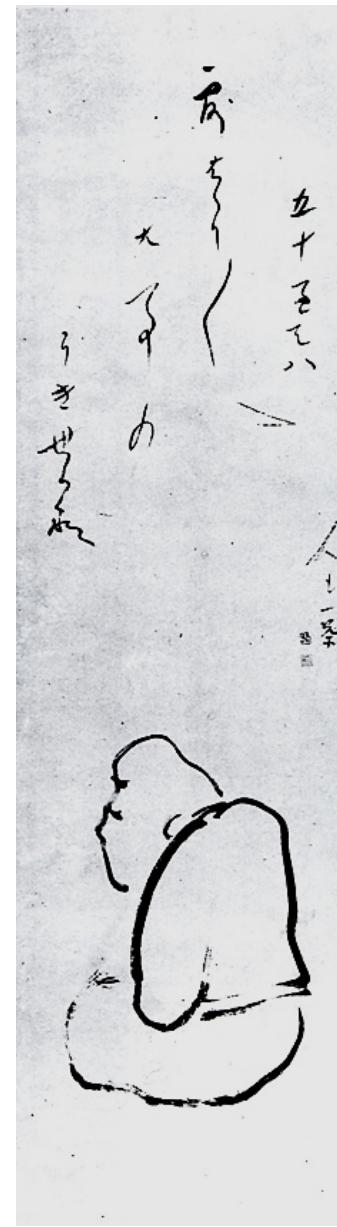
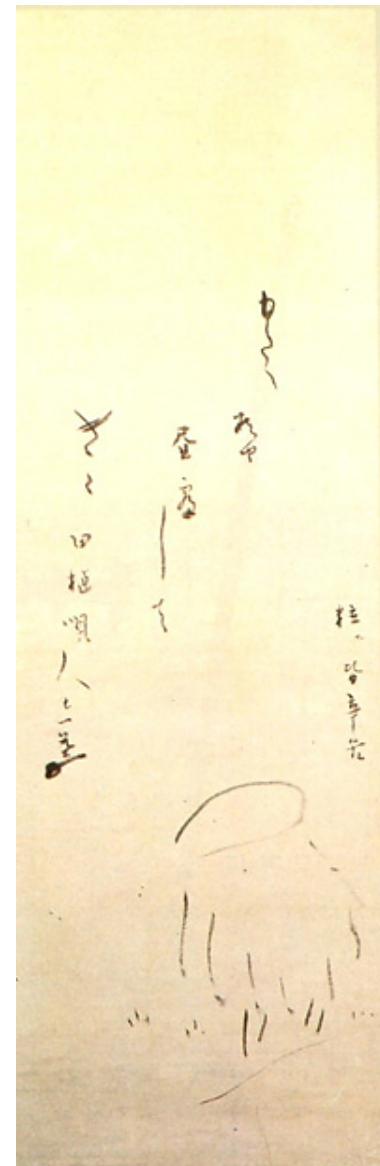
書幅 13.0×13.7 cm 「蛙たゝかひを見にまかる四月廿日也
けり やせ蛙まけるな一茶是に有」

一茶は、定住し、結婚して、死までの14年間を故郷で暮らした。若くて働き者のお菊さんとは、たいへん仲が良かつたようで、3男1女を授かるが、天は無情であつた。長男の千太郎は、生後28日ほどで発育不全で亡くなり、長女さとは、1年2ヶ月で天然痘で亡くなつた。次男の石太郎は、母の背中で窒息死、生後96日であつた。三男の金三郎は、1年9ヶ月で栄養失調で亡くなつた。金三郎が亡くなつた前後に、37歳で、お菊も病死している。文政6年(1823)一茶61歳の時である。一茶は寂しかつたであろう。お菊宛のやさしい手紙が残つてゐる。神も仏もあつたものではない。一茶も、58歳の時に中風(脳梗塞)に罹り、言語障害にもなり、歩行も困難だつたようである。



「家」自画贊(対幅の一) 110.6×36.4 cm
絹本墨画 晩年の作

にはの蝶子が這へばとびはへばとぶ
家も一茶

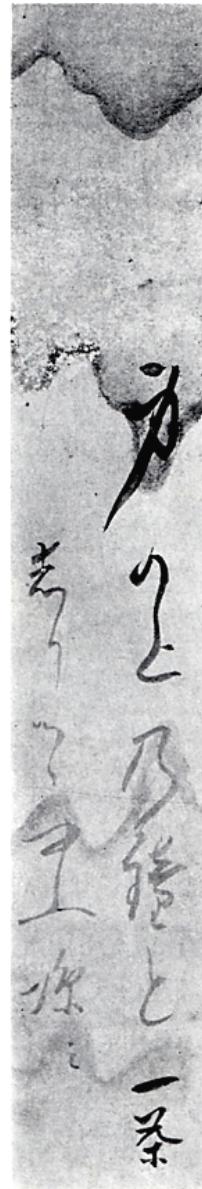


粒々皆辛苦 もたいなや昼寝して聞く
田植歌 人も一茶
一茶は生涯、耕さず喰らう遊民として
の自分を恥ずかしく思っていたようだ。

一筆画自画像と俳句贊
五十至ては露はらりはらり大事
のうき世かな 人も一茶

我国は艸さへさきぬさくら花 一茶

書道もろもろ塾 (2014, 7, 27)



身の上の
鐘としり
つゝゆふ涼
み一茶

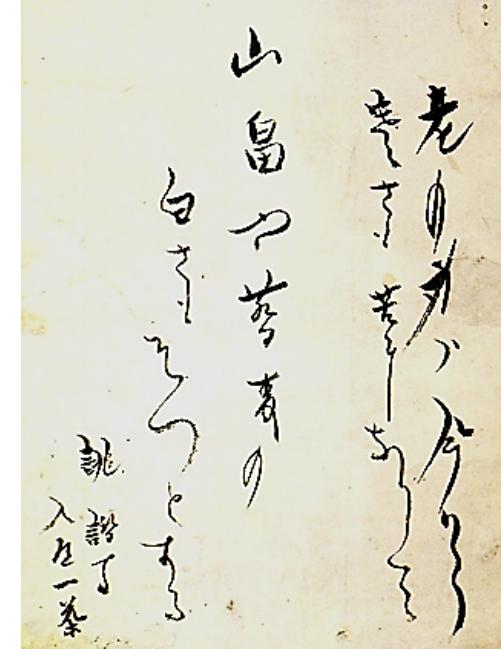


梅の木のある
身の上の涼
としり
山家哉 一茶

一茶の短冊作品



晩年の書。側筆を基調に素直に書かれている。あまり作為を感じない自然な書きぶり。左右の払いが独特である。線は細いが、張りのある線質で、力が漲り、生き生きしている。



懐紙 老の身は今から寒さも苦になりて
やまはたそば
山畠や蕪麦の白さもぞつとする
はいかいじにゅうどう
俳諧寺入道一茶

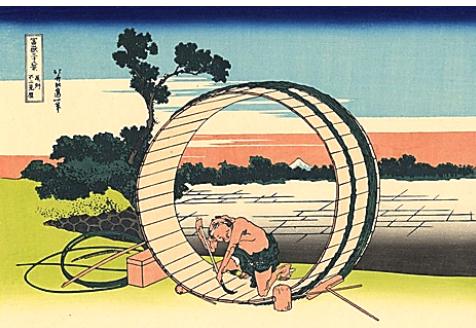
妻子をすべて失った一茶は、お菊さんが亡くなつた翌年、武家の娘ゆき（38歳）と再婚したが、数か月で離婚。肌が合わなかつたのであろうか？寂しかつたのであろう、離婚から2年後の文政9年（1826）一茶64歳の時、越後二股の「やを」（32歳）と再々婚。やをは、子連れであつた。翌年の夏、柏原宿大火で家を失い、一茶たちは、土蔵に仮住まいした。その年（1828）11月、一茶死去。65歳であつた。

翌年の文政11年、未亡人やをに一茶の子、「やた」が生まれた。その後、やたは、婿養子を迎へ、46歳まで生き、三男一女の母になつたといふ。

老の身は今から寒さも苦になりて
山畠や蕪麦の白さもぞつとする



ほくさい ふがくさんじゅうろくけい かながわおきなみうら
北斎「富嶽三十六景」神奈川沖浪裏



ほくさい ふがくさんじゅうろくけい びしゅうふじみがはら
北斎「富嶽三十六景」尾州不二見原

北斎 (1760~1849) 一茶と同時代人の北斎とには共通した感性や思想がある。

(北斎の絵の構図と一茶の句に見られる構図の類似点)

「……この画面の遠景としては、浪裏の険しい弧線の中に遠く小さく白雪に肩を埋めた富士山がのぞまれる。洋画の遠近法をとりいれたこの構図は、さきの一茶の句の構図とあまりにも酷似している。……」

「・・・大を小にという極端な価値の顛倒による対照によってユーモラスな一茶世界を描き出す・・・不調和な対照のもたらす違和感に俳諧の諧謔味が生れてくる。」

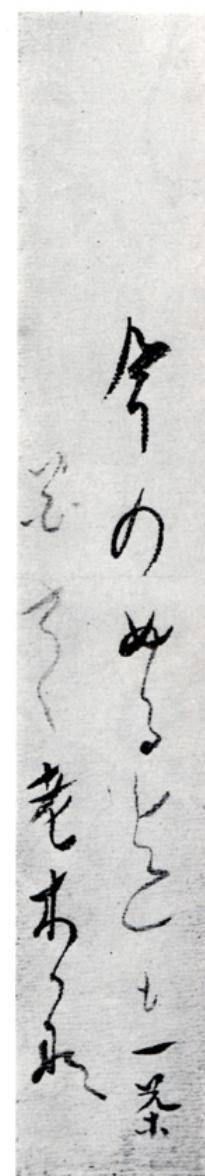
（栗山理一著『小林一茶』 日本書人選 19 築摩書房より）



絶筆「春耕宛書簡」文政10年（1827）一茶65歳

御安清奉賀 されば私は
丸やけに面是迄参り候。
此人田中へ参り候
私参候迄御とめ可被下候。
申入度 かしく
壬六月十五日節
土蔵住居して
やけ土の
ばかりくや
蚤さはぐ
一茶
紫春畊大人

菜の花のとつはこれなり富士の山
夕不二に尻をならべてなく蛙
悠然として山を見る蛙かな
蟻の道雲の峰よりつづきけん
ありあけ
有明や不一へ不二へと蚤のとぶ
かたつぶりそろく登れ富士の山
じんぼう
蜻蛉やはつたと睨むふじの山
雪とけて村いっぽいの子どもかな
初夢に古郷を見て涙かな
名月をとつてくれると泣く子かな
夕桜家ある人はとく帰る
めさナジ鶯なナジトヒリ我



今のめる迄も
花さく老木か
な 一茶



星様のさゝや
き給ふけしき
哉 一茶



泰平賀
松陰に寝てく
ふ六十よ州か
な 一茶